「森林の多面的機能」
解説シリーズ

第28回　　景観・風致形成機能

関西支所　　奥　敬一

景観はもっとも当たり前の機能か？

「森が見える」ということは、森林がもっているあらゆる機能の中でも、もっとも当たり前のことかもしれません。しかし「森が見える」ということと、それが「森の機能だ」と認識することとの間には、それほど当たり前ではない人と森との複雑な関係が積み重なっています。

誤解を恐れずに、景観・風致形成機能の本質をひとことで表すとすれば、森林の存在によって私たちの生活を取り巻く視野の中に自然の「おもむき」が添えられること、となります。ところが、この「おもむき」こそが、文化と社会の長い歴史や個人の生活史から成り立っているので、見る人のこころの持ちよう、つまりその人の生きる時代、その人の生きる社会、その人がおかれた時々の状況、によって変わりうる性質を持っているのです。にもかかわらず、多くの人が森林に「おもむき」をかたちづくる効果があると共通して認めるのは、私たち人間がある程度の幅におさまる「からだ」と「こころ」を持っているからでもあり、また多様な森林植生のいずれもが美しい表情を見せる可能性を秘めているからでもあります。

ほかの機能を補完し、また補完される

景観は保健休養や文化と関わるほかの機能群と、とりわけ密接な関係にあります。

保養やレクリエーション、教育のための森林には、すぐれた景観が求められるのはもちろんですし、また芸術や伝統文化を支え、地域の多様性を形作るのにも、森林の視覚的なありさまが大きく貢献しています。そして、その芸術や伝統文化に触れ、地域独自の風土を実感し、森を歩き森林の仕組みを学ぶことで、景観に対する見方も醸成されていくのです。

このようにお互いに入れ子状、あるいは連環状の関係で、ほかの機能とわかちがたく結びついていることも、この景観・風致形成機能の大きな特徴なのです。ほかの機能とお互いに作用することによって「おもむき」を増幅させるとでも言えるでしょうか。

景観を意識するとき、しないとき

その時々の状況によって、景観は人の意識にのぼったり、また逆に意識はされないけれど人の心理的状況に影響を与えたりすることもあります。このことを表現するためによく比喩的に使われるのが「図と地」の関係です。白地の紙に黒丸が書いてあれば普通は黒丸を「図」として意識するわけですが、それは「背景」となっている白地が美しい「地」であることで、よりはっきりとした印象を与えるのです。

日常生活の中での森林景観は、どちらかというと当たり前の存在として溶け込んでしまうことが多いので、特段意識されることは少ないかもしれません。まさに「地」の景観です。しかし、そうした景観でも、そこに住んできた人々にとっては、共通の体験を育んでいたり、あるいは自分の居場所として自覚できるような特色ある地域性を持っていることもあります。そのような地域のシンボルとなる森林は、何かの折りに触れて「図」として意識に浮かび上がってくるのです。ですから、日常生活の周囲にある森林景観に急激な変化が起こると、たとえそれが普段は「地」としか見られていない森林であったとしても、時には大きな喪失感や違和感をもたらすことにつながります。一方で、植生のゆっくりとした変化は見過ごされやすく、いつの間にか元々見ていた「図」とは大きく違った森になってしまい、気付いた時にがく然とする、ということもあるのです。

森林を扱う人々（行政であれ、研究者であれ、NPOなどの市民であれ）は、同時に森林の「おもむき」を操作する人々でもあります。自分のしようとしている操作が、景観を通して人々の目にどのように写るのか、将来の森林の姿形を見据えつつ、想像力を働かせる責任も合わせ持っているのです。

写真：　普段見慣れた森林も、思いがけない美しさを見せるときがある